

自由主義の国作りを国民に訴えて亡くなった特攻隊員

上原 良司(りょうじ)

穂高 耳塚(みみづか) 出身・池田町生まれ

〔上原良司が活躍した時代〕 1922(大正11年)～1945(昭和20年) 享年 22歳

大正		昭和			
11	14	10	16	18	19
父は医師 池田町に生まれる。 5人兄妹の真ん中	有明に移り成長する。 九州小倉・台湾を父の 仕事で移り住む。	松本中学校に入学する。	慶応義塾大学予科に入 学する。 松本中学校を卒業する。	慶応義塾大学予科を繰 り上げ卒業し、同大学 経済学部に進学する。	※第1遺書(遺本) 松本第50連隊へ入隊 する。 学徒出陣により、陸軍 教育隊へ入校する。
					※第2遺書(綿郷の時) 熊谷陸軍飛行学校相模 教育隊へ入校する。
					5月11日 陸軍特別攻撃隊第56 振武隊員として沖縄嘉 手納湾上のアメリカ海 軍機動部隊に突入し、 戦死する。
					※第3遺書(所感) 5月10日 4月特攻隊員となる。 熊谷陸軍飛行学校を卒 業する。
					館林教育隊にて飛行操 縦訓練をする。



戦争という過酷な生活の中で彼が持つ自由主義への考えに心打たれる！

『きけ わだつみのこえ』(岩波文庫)

学徒動員の学生、若者たちの手紙、日記、メモなどの収録集(戦没学生の手記)

その中で、巻頭に掲載された**所感**が人々の心を打つ。

(特攻前夜、新聞記者の求めにより書いた文章)

この時代、戦争で亡くなっていく若者が家族や恩人らに宛てた遺書は数多く存在するが、良司の書いた**所感**は、それらとは異なっていた。それは、これからの理想的な国家を作っていくことを**国民**に訴えたことである。彼の理想がそこにある。

- 一器械である吾人は何も言う権利はありませんが、ただ願わくば愛する日本を偉大ならしめられん事を国民の方々をお願いするのみです。
- 愛する恋人に死なれた時、自分も一緒に精神的には死んでおりました。天国に待ちある人、天国において彼女と会えると思うと、死は天国に行く途中でしかありませんから何でもありません。
- 明日は出撃です。・・・明日は自由主義者が一人この世から去って行きます。彼の後ろ姿は淋しいですが、心中満足でいっぱいです。

所感を全部読むと死を前にした彼の心が分かります。

◎戦時下 別れを口に出せず！家族との乳房橋での最後の別れ

特攻が決まり最後に帰郷したとき、「日本は敗れる。俺が戦争で死ぬのは愛する人のため。戦死しても天国に行くから靖国神社にはいないよ」と言って家族をはらはらさせた。しかし、特攻隊員に選ばれて、いつ出撃するか分からない状態のことは何も告げられず・・・そして別れの時が・・・最後に乳房橋のたもとで、大きな声で「さようなら」と3度も言って別れていった。母親は、それを聞き、「良司は、もう戻ってこないと思った。」と後で振り返ったそうだ。



乳房橋より生家を振り返る

愛する人への密かなラブレター

この時代、自分の思いをそのまま相手に直に語ることはできなかった。しかも徴兵され、特攻になりいつ命がなくなるか分からない中、彼はユニークな方法で愛読書であった『クロオチェ』という本の中に、愛する人への思いを残していた。

この本の中に暗号のような形で愛する人への遺書が残されていたのだ。本文の中に赤ペンで特定の文字が囲まれている。それをたどっていくと次の文章が浮かび上がってくる。

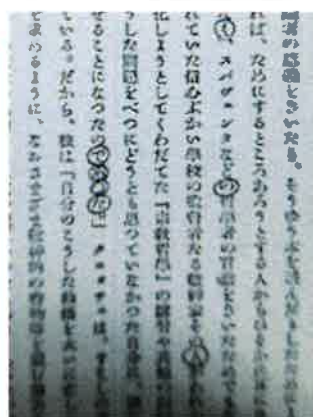
何と、熱い想いだろうか。



初恋の人

きょうこちゃん さようなら
僕はきみが好きだった。
しかし、そのとき、きみはこ
わんやのひとであった。そして、
わたしのこころをきんだ。そして、
ときあひのこころをきんだ。そして、
ことを・・・ことばをきんだ。そして、
ことを・・・ことばをきんだ。そして、

遺書



本文

※参考文献

『きけ わだつみのこえ』 岩波文庫 日本戦没学生記念会

『ああ、祖国よ、恋人よ、きけわだつみのこえ』 信濃毎日新聞社 中島博昭

・市民タイムス記事「1人の自由主義者の死」 小松芳郎

※関係する場所

○有明医院(育った場所 家庭) ○乳房橋(家族との最後の別れの場所) ○池田町クラフトパーク(石碑)

○松本市和田 万年寺(墓地 兄2人と一緒に)